



2人姉妹の妹として愛知県に生まれる。父はカメラメーカーに勤めるエンジニアで、絵画、俳句、園芸をたのしむ趣味人。専業主婦の母は「女性は自立しなければならぬ」という信念を持つ人だった。

小学生のころ、家族4人でテール上の果物を囲み静物画を描いたことを今でもよく覚えています。絵が好きで父が洋画家を自宅に招き、手ほどきを受けたのです。

そのとき、見事な抽象画を描きあげた姉は後に陶芸家に。私も中学に進んでからは美術部で油絵を描くことになりました。

絵に限らず、とにかく手を使うことが好きでした。プラモデルにも夢中になり、船やモーターボートを完成させた記憶があります。祖母の着物のすそ柄がきれいだったので、切り取って人形の洋服を作りしかられたことも。

# 患者のため あきらめない

②



小学校のころ、自作の船のプラモデルを前に

ていました。小学4年のとき大阪に転居しました。すると、帰宅途中に男子から待ち伏せをされいじめられました。翌日、彼らを職員室につれていき「謝れ」と。そんなこともあってか、5年生のときに生徒会長に立候補することにになりました。正義の象徴の白い手袋をして選挙演説をしたら見事当選、しかし翌年は元気がなくなり落選してしまいました。

## 転校重ね、野山を駆け回った小学校時代

### 物理好きの文学少女、理学部に進み挫折

#### 「手に職を」と医学部に転じ、良き仲間得る

大阪教育大学付属平野中学校に進学。片道2時間の通学途中で宿題をすませてしまう。

「ながら仕事の癖はこのころから」。大阪の北野高校に進んでからは、水泳部で体を鍛える。子どものころからの読書熱も一層高まった。

小学校のころから、父親の影響で俳句を詠む文学少女でした。中

学では早くも「デカメロン」「大地」を読むなど早熟で、高校に入ると、トルストイ、スタンダール、モーム、サルトル、大江健三郎などを読みふけりました。三島由紀夫も愛読していた作家のひとつ、彼の自決はショックで、泣きに泣きました。論文の宿題では、サドの「悪徳の栄え」とカミュの「異邦人」を選び、友達と徹夜で議論して仕上げたものです。

国語とともに好きだったのが物理。パズルを解くようで得意な科目でした。ノーベル賞を取られた生討論ばかり。悩んだ揚げ句に、医学部に転部して手に職をつけようと考えました。祖父が結核を患ったときにかかった女医さんがすばらしかったと聞いていたのです。入学翌年、医学部を受け直して何とか合格しました。

湯川秀樹氏にあこがれ、京都大学の理学部に進もうと思いましたが、受験したのは、学生運動が盛

んだった1971年のこと。雪のなか、機動隊が守るなかの入学試験だった。

京都大学理学部に入り、初めての挫折を味わいました。子どものころから母親に「職業を身につけなさい」と言われて育ちました。

ところが理学部に入ったところ281人中女性2人、「女は卒業してもお茶くみの仕事くらいしかないからな」と言われたのです。学生運動の影響で授業もなく、学

問き手は編集委員 野村浩子